

心の安寧を求めて

- チベット仏教の視点から -

マチウ・リカール/ラブジャム・リンポチェ

聞き手：佐多保彦 株式会社東横機 代表取締役社長

佐多：ネパールのカトマンズ郊外にシェチェン診療所(＊)が開設されてから、すでに2年近くが経とうとしています。現在の状況はいかがですか。

マチウ：皆様のご協力のおかげで、開設当初から患者数は順調に伸びています。1日に100人近い患者が診察に訪れることもあります。私たちの診療所では、医療行為を行うだけでなく、全ての患者について人生相談を受けるなど精神的なケアまで行うことを心がけています。一般診療のほかにカウンセリングセッションを設け、長いときは半日もかけて患者の話を書くこともあります。医師と患者の間により人間関係を築き、まず患者に信頼してもらえる環境づくりを目指しているのです。

そのために、診療でもホリスティックなアプローチを心がけ、西洋医療やチベット医療などを組み合わせることによって、その患者にとって本当に必要な治療を総合的に判断することにしていきます。

最近では、インドなどのより貧しくなかなかに診療を受けられない地域の患者のために、車を使った移動診療を始めました。

ラブジャム：カトマンズでは地震がとても多いのですが、去年も大地震が起こって40～50人の方が亡くなりました。そのような場合でも、地元住民と診療所が自然と協力体制をつくり、迅速な医療支援を行うことができました。

佐多：ダライ・ラマ 14 世殿下のご意思もあって、チベット仏教は現在とても積極的に対外活動を行っていらっしゃいますね。アメリカの9.11事件についても、殿下が世界に向けて発信したメッセージは多くの人々の関心を集めました。

マチウ：ダライ・ラマ 14 世殿下は、人間が人間を殺傷するために爆弾を使うことが信じられないと、大変な衝撃を受けておられました。テロを起こした彼らは、何か月もかけて作戦を練り、完璧に計画を成功させました。大変な知性の持ち主です。しかし、人の心から他人への思いやりや愛情といった気持ちが抜けてしまうと、人の知性は強力な武器となり得るのです。現代の教育は、私たちに高度な知識と情報をもたらしますが、人間のポジティブな資質を高めることには無関心です。

事件の後、殿下はブッシュ大統領に書簡を送られています。深い哀悼の意を表明するとともに、暴力的な行為で報復することについて



左からマチウ・リカール師、ラブジャム・リンポチェ、佐多

慎重に考えて欲しいと述べておられます。暴力は暴力を生むだけで、決して解決方法にはなりません。

佐多：今回の事件は、私にとっても非常に象徴的な事件でした。広島や長崎では一体何人の方が亡くなられたと思いますか。アメリカは戦争という大義のもと、原爆投下については一度も日本に謝罪していません。戦争は日本が先に始めたのだから、アメリカは悪くないというわけです。仏教では憎しみを持つことは大変いけないことになっていますが、アメリカとの戦争で亡くなられた方々の憎しみ(怨霊)が9.11事件を招いてしまったのではないかと、自分が日本人のせいでしょうか、即座にそのような思いが浮かびました。

私たち日本人は、とても平和で穏やかな民族だと言われますが、心の底には戦争で負った大きな哀しみを秘めています。それが日本の実状ですが、アメリカはその日本に未だ広大な軍事基地を配置しています。その広さは、全体で東京都の約1.3倍にもなるそうです。

私個人としては、アメリカのよいところも理解していますし、色々な面で尊敬もしていますが、未だにアメリカと日本は対等な関係ではないと、最近では日米双方の純感さに危機感に近いものを感じています。

マチウ：ダライ・ラマ 14 世殿下も、今回の事件を引き起こした要因は、西欧の超大国が長い間多くの人々の絶望や不満の声に対して無関心であったこととおっしゃっています。今回の事件を本当に解決しようとするのなら、彼らと対話をする努力をし、なぜ彼らはこのような事件を起こしたのか、憎しみはなぜ生まれたのかという根本的な問題を解決するよう努力しなくてはなりません。

旧ソ連がアフガニスタンに侵攻を開始したとき、世界はなにもしませんでした。彼らは見捨てられたと感じたことでしょう。世界の人々が、他人の苦しみや悲しみ、不安を顧みない心を持っていたならば、このような不幸な事件は起きなかつたかも知れません。そして、アメリカがアフガニスタンを支援するために、彼らに武器を渡しました。国が復興するための支援をする代わりに、彼らに武器を渡したのです！そしてそれが結果的にアメリカを攻撃する武器となりました。西欧諸国は武器の取引に従事し、そしてその売買によって平和を成り立たせています。これは大きな矛盾です。ダライ・ラマ 14 世殿下のお考えの根幹にこうあります。「外的武装解除は、私たちの心から憎しみを追い

マチウ・リカール

バストゥール研究所にて理学博士号を取得後、元国立科学センター研究員の職を経た後、以前より私淑していたカンギル・リンボチェのもとでチベット仏教の修行を積む。彼の死後、シェチン僧院にてディルゴ・ケンツェ・リンボチェのもとで12年間学ぶ。89年からはダライ・ラマの通訳を務め、欧米各国を随行して回っている。父君は現代フランスを代表する哲学者ジャン＝フランソワ・ルヴェル氏。父君との共著『僧侶と哲学者』はベストセラーとなっている。

ラブジャム・リンボチェ

リンボチェは最高位の僧を指す。初代ラブジャムから数えて6代目にあたる「生まれかわり」として承認され、現在はシェチン僧院の僧院長を務める。祖父ディルゴ・ケンツェ・リンボチェは20世紀を代表する宗教指導者の1人であり、かつダライ・ラマの師でもあった。

(*) 2000年10月に、スイスと日本の篤志家の寄付を得て開設。



『僧侶と哲学者』
新評論 本体 3800円

出すという内的武装解除から始めなくてはならない」と。

ラブジャム：アメリカ人は、1人のアメリカ人兵士が亡くなくても大変嘆き悲しむのに、そのそばで多くの罪のない人々が何百人と亡くなっていることに対して無関心であることに驚いたことがあります。

佐多：以前人間の心の中には黄金があるということを知りました。その黄金を見つけ出すことができれば、人はこのような争いを避けることができるのでしょうか。

ラブジャム：人はみな心の中に「仏性」というものを持っています。それを心の中の黄金と表現しています。煩惱というヴェールに覆われているために気づかないだけで、一人ひとりの人間が仏陀となる可能性、すなわち完全な解脱と悟りに達する可能性を秘めているのです。この黄金を発掘し磨きをかけることができれば、この世から多くの愚かな争いがなくなることでしょ。

佐多：人生は「自分探しの旅」のように思えます。一生をかけて「自分とはなにか」ということを見つめる旅だと思うのですが。

マチウ：人がこの世で生きる意味を見出せなかったら、この世は非常に苦悩にあふれたものとなります。香港で講演を行ったときに、若い男性が「この世に自分の存在価値を見出せない」と相談してきました。高校進学、大学進学、そして就職と機械的に人生が進み、そして都会の日常は毎日同じことの繰り返しです。しかしそのような日常の中からこそ、生きる意味を積極的に引き出すことが大切なのです。

また、ある男性から、自分が本当にやりたいことが分からないために何度も職を変えていると相談を受けたこともあります。私は言いました。1日でも2日でもいいから静かな森にでも行き、余計なことはなにも考えずに、ただひたすら「自分が本当はなにがしたいのか」と考えてみなさいと。そうすれば、次の日の朝目覚めたときに自ずと答えが出てきます。有名になりたい、裕福になりたいという欲望に負けて、人は人生において本当に大切なものを見失いがちですが、名声や富といったものから得られるものがどれほどのものなのでしょうか。

佐多：アメリカの徹底した資本主義のもとでは、一握りのグループを除いて雇用状況はとても不安定です。そのような中では、自然と人々の心もずさんでいきます。しかし、私自身のことを考えても、父親から会社を引き継ぎ、事業規模を拡大し、それに伴って悩みも深くなっていきます。もし私が僧院で生活することが許されたのならば、おそら

く非常に意義深い生活が送れたのではないかと思います(笑)。しかし、社会はそれでは成り立ちません。アメリカの社会のシステムにも問題はあるものの、社会が成り立つためには必要なことも確かです。私は帰依しているからと、ただ社会から逃げてしまわわけにもいきません。実際、社会ほど厳しい修道院はないとも考えています。修道院では考えられないような誘惑がいたるところに存在しているので、すから。もっとも、インターネットが発達した現代では、修道院も昔とは違かもしれませんが(笑)。今後は、仏教を社会の中でどう活かしていくのか、それを実践していただきたいと期待しています。

マチウ：確かに、一般の方は家庭や仕事に縛られて僧院に引きこもったりすることはできません。しかし、仏教の考えは生活のどんなときにも役に立ちます。修行僧というのは仏教の道のプロであるというだけで、ある意味では単なる形式に過ぎず、修行僧であれ一般信徒であれ、それぞれの道があるわけです。

佐多：例えば、死を考えたときにふつう人はとても不安になります。私が敬愛しておりました禅宗の故秋月龍珉老師に、あるとき母が「死んだらどうなるのでしょうか」とお尋ねしたところ、「お母様、どうしてそんなことを今から心配されるのですか。そんなことは死んでから考えればよいのですよ」と笑ってお答えになりました。母があっけにとられていた様子が愉快でした。「今」、「ここ」、「自己」が大事と考える禅宗の極意でしょうか。

マチウ：アメリカである調査をしたところ、宗教に関係なく、強い信仰心を持っている人はそうでない人より平均7年長生きするという結果が出ました。信仰心を持っている人は、他の人々を助ける機会が多く、必然的に社会的つながりが強くなります。そして、死後も自分の人生が続いていくということを理解しているので、彼らの人生は常に希望に満ち、心が安定して健康になるのです。

仏教でも、死後に思いを馳せて不安になるのではなく、今この人生と真剣に向き合いなさいと説いています。死後の世界は今の人生の結果であり、現在ネガティブな生き方をしていると、次の人生も苦しみが多いものとなってしまいます。そして、意識は死後も続いていきます。死は単なる通過点に過ぎず、そこで終わりになってしまうということはありません。私たちはそのことを理解しているために、死後を思っても不安になることはないのです。

救急救命士と気管内挿管

ラリゲルマスクとの比較

岡崎 久恒



岡崎 久恒 / おかざき・ひさつね

1955年、神奈川県生まれ。群馬大学医学部卒業。東京医科歯科大学医学部麻酔科、都立府中病院などを経て、90年東京都多摩老人医療センター麻酔科、95年同センター麻酔科医長に着任。2001年岡崎クリニック(東京都国分寺市)開業。

最近、これまで医師だけに認められていた気管内挿管を救急救命士にも認めるべきかどうかという話題が、メディアで頻りに取り上げられるようになった。厚生労働省と総務省消防庁との合同作業部会では、限定条件つきで気管内挿管を救急救命士にも認めようという方向で合意が得られたとのことである。しかし、具体的な条件などこれから慎重に話を詰めていく必要は多く、今後も様々な議論が交わされることになるだろう。本稿では気管内挿管と従来法であるラリゲルマスク(*)を比較しながら、気管内挿管の問題点を明らかにしていきたい。

気管内挿管という言葉聞いても、一般読者の方々の中にはピンとこない方も多いただろう。気管内挿管というのは、気道確保の手段の1つである。事故などにより意識障害や心肺停止が起きると、筋肉が緩み、空気の通り道である気道が狭くなったり閉塞してしまうことがある。これを開通させて再び空気が通るようにすることを気道確保と言う。現行の法律では、救急救命士が気道確保を行う場合、心肺停止した患者にのみ特定の医療用具による気道確保が許されている。使用が許可されている気道確保用医療用具は、ラリゲルマスクと閉鎖式エアウェイの2種類で、気管内挿管は認められていない。また心肺停止以外の、例えば意識障害を起こした患者に対しては、ラリゲルマスクなどの使用も禁じられている。行えるのは、フェイスマスクと経鼻エアウェイなどを使用した人工呼吸までとなる。

それでは、なぜ今まで救急救命士が気管内挿管を行うことが法律で規制されていたのだろうか。

端的に言えば、気管内挿管は患者を傷つける可能性が高い方法だからである。気管内挿管の特徴については後述するが、医療用具を使った気道確保というのは患者にとって有害となるおそれが多分にある。そのため、原則として不測の事態に対応できる医師にのみ認められている。救急救命士制度を発足させるにあたって、あくまで患者の安全面を重視して第一段階的な規制を行い、救急救命士が経験を積んでいった後に、徐々に見直していこうという方針は当初から存在していた。それが、最近のメディアでは、「なぜ医師に許されているものが救急救命士に許されないのか。職域を荒らされることを恐れた医師のわがままではないのか。気管内挿管を行えば

助かる命がたくさんあるのではないか」というような単純な規制緩和の話に陥り、問題の本質を捉えることなく、単純に“法の遵守か人命か”といった短絡的な議論にすりかわっているように思えてならない。

それでは、気管内挿管の特徴について触れてみたい。

まず気管内挿管の第一の利点は、一度適切な位置に留置されればもっとも確実な気道確保の方法であるということが挙げられる。また、気管内へ薬物投与ができるという利点もある。

その反面、患者にとって有害となる可能性も含んでいる。

最大の欠点は、気管内挿管には時間がかかるということである。気管内挿管では、喉頭鏡という金属製の器具を口から入れて喉を大きく広げ、声門を直視下に確認しながら、気管内にチューブを入れる必要がある。これには高度な技能を要し、手技を行う者の熟練度によって作業を終えるまでの時間にかなりのばらつきが出る。一般に、人間を対象として医師の直接指導下に相当数(50~100例程度)の臨床研修があって初めて現場で通用するようになり、訓練用の人形で練習した程度では全く使いものにならない。人形や動物で練習した程度の新米外科医に、ベテランのサポートなしに人間の手術をうまくやれと言っても無理なのと同じことである。臨床研修での気管内挿管は、全身麻酔下に手術を受ける患者の中で状態のよい人を対象として、あらゆる器材を揃えてベテラン医師に手とり足とり指導を受けながらという極めてめくまれた状況下で行われる。しかし、救急救命士が現場で作業にあたる際は状況が遙かに悪く、サポートしてくれるベテラン医師もその場にはいない。このような状況で気管内挿管を行うのは相当な困難を伴い、短時間に確実に行うのは極めて厳しいということが容易に想像できよう。

2つ目は、気管内挿管は患者にとって侵襲的な方法だということである。気管内挿管は挿管時に歯を折ったり、声門や声帯を損傷するなどのトラブルが起こりやすい。その他にも、食道内挿管や片肺挿管など命に関わるような重大なトラブルを起こす可能性がある。特に食道内挿管は初心者がおかしやすいミスの中でもっとも多いものの1つである。気管ではなく誤って食道内に挿管してしまえば体内に酸素がいなくなり患者は死亡する。



気管内チューブ



ラリゲルマスク

また中には、顔や首の形・角度に異常があったり、口が十分に開かないなどといった、通常の方法では気管内挿管が不可能な患者が存在する。これを挿管困難症と言い、気管内挿管を行う上で最大の問題となる。やっかいなことに外見で判断することが難しい患者もいて、経験が少ない者がこのような事態に遭遇した場合、技術が未熟であるために声門が見えないのが、挿管困難症のために声門が見えないのかを判断することは困難である。

つまり、気管内挿管は確実な気道確保法ではあるが、患者にとって決定的な不利益にもなりえる“ 諸刃の剣 ”なのである。

そして、さらに困った問題が生じている。研修中の救急救命士が実習の一環として手術患者に挿管することについて、患者の承諾を得ることが果たして実行可能なかということである。前述したように、気管内挿管は患者にとって有害となり得る可能性があり、研修とはいえ、救急救命士が気管内挿管を行うことに対し、果たして患者が承諾するであろうか。そして最終的には、研修中に発生したトラブルについて誰が責任をとるのかという議論になるだろう。指導する医師に全責任を負わせるということにでもなれば、そもそも救急救命士の研修を引き受けようという施設自体がなくなるのではないだろうか。また研修とはいえ、救急救命士が院内で挿管を行うことは医師法違反とならないのかという問題も出てくる。似たような例として、歯科医師が救命センターで気管内挿管などの医療行為を含む研修を行ったことに対し、指導した医師が起訴されるという事件が最近起きている。

一方、現在救急救命士に許されているラリゲルマスク(以下LMA)についてはどうであろうか。

最大の特徴は、短時間で挿入が可能であり、気道確保の成功率が高いということである。声門を見る必要がないので挿入に時間がかからず、その構造上、食道内挿管や片肺挿管などの致命的トラブルを起こすことがない。そして、挿管困難症のような挿入不能例はごく稀である。また、気管内挿管に比べて手技の習得が容易であり、挿入時に患者を傷つけることが極めて少ないことも大きな特徴と言える。つまり、患者を使った研修時にトラブルを起こす可能性も低いということになる。

(*) ラリゲルマスク

患者にとってより優襲が少なく、迅速に気道を確保するために作られた気道確保器具。声門を通して直接気管に挿入される気管内挿管と異なり、喉頭、下部咽頭を覆うかたちでシールし、気道を確保する。過去10年間、全世界で1億人の患者にすでに使用されている。病院の手術室で広く用いられているだけでなく、救急救命士にもその使用が法律で認められている。弊社が採用しているラリゲルマスクという呼称の他に、ラリジアルマスク、ラリゲアルマスクとも呼ばれている。

- この稿に関してご意見・ご感想などございましたら、下記宛先までご連絡ください。
岡崎クリニック 東京都国分寺市南町3-18-6 TEL. 042 359 6199
- 救急救命士と気管内挿管の問題については安田勇先生と小濱啓次先生からも原稿を頂戴し、挟み込みチラシに掲載しておりますので、こちらもあわせてご参照ください。

反対に欠点としては、高い気道内圧をかけるとリークを起こしやすく、正しい位置に納まっても大きな振動によりズレやすいことが挙げられる。救急救命士からのクレームでもっとも多いのが、この振動によるズレである。また、胃内容物が気道に侵入する可能性があることや、気管内への薬物投与が困難であるという点も見逃すことはできない。

気管内挿管は気管内に適切に留置されればもっとも優れた気道確保法であることは間違いない。しかし、前述のように様々な問題があり、対象が心肺停止状態の患者であるため数分の遅れが致命的となる状況で、救急救命士が医師の直接指導なしに現場で挿管するとなれば、果たしてその行為が救命率の向上につながるのかという疑問を抱かざるを得ない。

心肺蘇生時の気道確保および人工呼吸においてももっとも大切なことは、1秒でも早く心臓内に酸素化された血液を送り込み心拍再開を促すことと、心拍再開にもっとも重要な心臓マッサージの中断時間を最短にすることである。ほんの数分の遅れによって、本来蘇生し得たはずの患者が蘇生に失敗する可能性が急激に高まるのが、救急救命の現場である。蘇生を目的とした救急現場での気道確保は、全身麻酔下にある手術予定患者へ行うような時間的余裕のある状況で行うものとは根本的に異なる。まず施術者自身が慣れていて、かつ成功率の高い方法で臨むことが先決である。現場到着と同時に経鼻エアウェイとフェイスマスクによる人工呼吸を開始し、LMAの準備ができたところでLMAに切り替える。LMAにて体内、特に心臓を十分に酸素化したところで状況が許し余裕があれば、気管内挿管に切り替えるのがベストであろう。一刻を争う状況下で、ベテラン医師の直接指導を仰げない中、真っ先に気管内挿管を選ぶことは決して得策ではない。

誤解していただきたいくないのは、決して救急救命士に気管内挿管は不要と言っているわけではないということである。LMAと気管内挿管は二者択一の関係にあるのではなく、相互の利点を生かして補充しあう関係であり、患者の尊い命を救うためにはどちらも必要なのである。大切なことは、まず患者の命を第一に効率のよい使い分けを考えることである。

ひびの入った水がめ

A Cracked Pot

作者不詳

インドに水くみおとこがいました。水くみおとはふたつの大きな水がめひとつずつ肩にかついた天秤棒にさげてはこびます。かたいぼろの水がめにはひびが入っていました。もうかたほうはきずひとつなく、小川からご主人さまの家までながいこと歩いてても、かならず水は満杯でした。でもひび入り水がめの水はいつも半分になってしまいます。2年がたち、毎日水くみおとはかめにひとつ半の水をご主人さまの家にはこんでいました。

もちろん、きずなし水がめは鼻高々でした。なにしろ水がめは水をちゃんとはこぶために作られたのですから。でもかわいそうなひび入り水がめはじぶんが半人前だとさげな思っていました。水はこびのために作られたのに、半分の量しかはこべないのです。

つらくて情けない2年がたったある日、ひび入り水がめは水くみおとこに言いました。

「じぶんがはずかしくてね。あんたにあやまりたいんだよ」

「なんで？ なにがはずかしいのかい？」

水くみおとはさげなました。

「この2年間というもの、わたしは半分しか水がはこべなかった。それというもおなかの横にあるひびわれから水が漏れるからなんだ。ご主人さまの家までもどる道々ずっとだよ。わたしができそこないのばっかりに、あんたはこんなにいっしょうけんめいはたらいで、その分もむくわれなんだからね」

水くみおとは古ぼけたひび入り水がめをかわいそうに思いました。そしてやさしくこう言いました。

「ご主人さまの家に帰る道で、きみの通るがわだけきれいな花が咲いているんだ。見てごらん」

それは本当でした。丘をのぼっていくにつれ、古ぼけたひび入りの水がめは道のへりに咲いているきれいな野の花を太陽が照らしているのに気がつきました。ちょっとすてきな水がめでした。でも道のさいごになると、水がめはやっぱりかしくなりました。水が半分になっていたからです。水がめはまた、水くみおとこにじぶんはできそこないだと言ってあやまりました。でも水くみおとはこんなふう answered からです。

「道のきみの通るほうだけ花が咲いていたんだよ、気がついた？ 反対側には咲いてないんだ。それはね、きみにひびわれがあることを知って、ぼくがそれを役に立てたんだ。きみの通るほうの道端に花のたねをまいてね。小川から帰ってくるとき、きみが花に水をやってたんだよ。2年のあいだ、ぼくは花をつんでご主人さまの食卓をかざることができた。きみがひび入り水がめでなければ、ご主人さまだってこんなきれいなものを楽しめなかったんだよ」

わたしたちはそれぞれじぶんだけのひびわれをもっています。わたしたちはみなひび入り水がめなのです。神の摂理のもとに必要なものはないものにもないのです。

今回は特に心に残った物語2編をご紹介させていただきたい。1編は作者不詳の『ひびの入った水がめ』。もう1編は現役推理作家の坂本光一氏による『笑わない昆虫学者』である。全く雰囲気の違いながら、共通してあるのは「この世の全ての命あるものに意味がある」という力強いメッセージでもいうべきものだろうか。我々一人一人の限られた“命”が大きな役割を持ってこの世に生を受けているということ、そして“命”の大切さを思わずにはいられない。



A water bearer in India had two large pots, each hung on each end of a pole which he carried across his neck. One of the pots had a crack in it, and the other pot was perfect and always delivered a full portion of water at the end of the long walk from the stream to the master's house, while the cracked pot arrived only half full. For a full two years this went on daily, with the bearer delivering only one and a half pots full of water to his master's house.

Of course, the perfect pot was proud of its accomplishments, perfect to the end for which it was made. But the poor cracked pot was ashamed of its own imperfection, and miserable that it was able to accomplish only half of what it had been made to do.

After two years of what it perceived to be a bitter failure, it spoke to the water bearer one day by the stream. "I am ashamed of myself, and I want to apologize to you."

"Why?" asked the bearer. "What are you ashamed of?"

"I have been able, for these past two years, to deliver only half my load because this crack in my side causes water to leak out all the way back to your master's house. Because of my flaws, you have to do all of this work, and you don't get full value from your efforts," the pot said. The water bearer felt sorry for the old cracked pot, and in his compassion he said, "As we return to the master's house, I want you to notice the beautiful flowers along the path." Indeed, as they went up the hill, the old cracked pot took notice of the sun warming the beautiful wild flowers on the side of the path, and this cheered it some. But at the end of the trail, it still felt bad because it had leaked out half its load, and so again it apologized to the bearer for its failure. The bearer said to the pot, "Did you notice that there were flowers only on your side of your path, but not on the other pot's side? That's because I have always known about your flaw, and I took advantage of it. I planted flower seeds on your side of the path, and every day while we walk back from the stream, you've watered them. For two years I have been able to pick these beautiful flowers to decorate my master's table. Without you being just the way you are, he would not have this beauty to grace his house."

Each of us has our own unique flaws. We're all cracked pots. In God's great economy, nothing goes to waste.

笑わない昆虫学者

坂本 光一

デビッド・ブルームは、世界で最も高名な昆虫学者でしたが、それ以上に、「決して笑わない昆虫学者」として有名でした。数限りない栄誉に輝きながら、そのどんなに晴れがましい授賞式でも、彼はいつも何かいらだっているような、あるいは悲しみに耐えているような表情をたたえていたのです。

人々は、彼の不幸な生い立ちが原因だろうと噂しました。彼が8歳の時、一家が乗った自家用車が崖から転落して、彼の両親と4歳になる妹が死んだのです。確かにそれ以来、彼は笑わなくなりました。だから、人々の噂は80パーセント正しかった。でも、それだけが原因ではなかったのです。

8歳のあの事故の日から、62歳になるまで、彼はひとつの夢を追い続けていました。あの事故の日。失神から覚めた彼は、押しつぶされた車の中に、血に染まった両親と妹の姿を見ました。彼は車から投げ出され、草の上うつ伏せに倒れていました。頭から血が流れて、少しずつ力が抜けて、目が見えなくなっていく。「このまま僕も死ぬんだ」と思いました。その時です。「おまえは生きなければならぬ」。すぐ近くで声がありました。彼は首を動かして周囲を見ました。が、誰の姿も見えません。「おまえには生きてやるべきことがある」。目の前の草が、かすかに動きました。彼のかすんだ目に、草の先にとまっている小さなテントウムシが見えました。

再び目を覚ました時、彼は病院のベッドにいました。包帯をされた頭が痛かったけれど、彼には色々なものが見えました。彼の両親と妹が死んだこと。それを医者が見ているのは、彼が生きていく力をなくすのを心配しているからだということ。でも、そんな心配は無用でした。もうその時、彼には生きる目的と強い意志があったのです。あの虫が言った、自分が生きてすべきことを探し実行すること。そして、言葉を探し出すこと。その日から、それが彼の生涯の目標になったのです。

退院した彼は、あの虫を探すことから始めました。あれは、妄想や神のお告げなどではなく、間違いなくあの虫が自分に語りかけたのだ。なぜとは言えませんが、彼には確信がありました。幼かった彼にも、話をする虫がいるというのは信じがたいことでした。でも、それを否定することは、自分自身を否定することでした。話をする虫は必ずいる。そして、それを探し出せば、自分が生きてすべきことを知ることができる。

彼は虫を探し続けました。10年、20年、そして50年。世界中の虫を

坂本 光一 / さかもと・こういち

1953年、千葉県生まれ。東京大学卒業。88年、『白色の残像』で第34回江戸川乱歩賞を受賞してデビュー。他に『二重の罟/ダブルトラップ』(講談社)、『ヘッドハンター』(日本経済新聞社)など。現在、三菱商事株式会社に勤務。

本作品は、コスモ石油株式会社発行『ダジアン』に掲載されたもの。

観察して、虫について書かれたあらゆる本を読みました。そして得た知識をまとめて発表すると、人々は口々に賞賛して、色々な賞をくれました。気がつくと、彼にはケンブリッジ大学の名誉教授という肩書まで付いていました。しかし、そんなことは彼にはどうでもよかったのです。どれだけ昆虫学者として実績をあげようと、彼の目的はあくまで、あの話をする虫を見つけること、彼が生きてすべきことを知ることだったのですから。

年をとるに従って、彼の苦悩は深くなっていきました。人生の残りが少しずつ少なくなっていくのに、未だに彼は目標を達成することができなかったのです。60歳になった時、彼の体は癌にむしばまれていました。彼は、余力を振り絞って虫を探しました。でも、どうしても、あの話をする虫に出会うことはできませんでした。

62歳になったある日、彼は自分の死期が近いことを悟りました。病院のベッドを抜け出し、車を拾って、54年振りにあの忌まわしい事故の現場に立ちました。彼の大切な家族を奪った崖は、雨で暗く濡れていました。彼は、ゆっくりと崖を下りました。その時、足場が滑りました。彼は落ちていきます。あの日と同じように。ゆっくりと目を開きました。雨が倒れた体を濡らします。体のどこにも感覚がありませんでした。「ここで死ぬんだな」と彼は思い、目を閉じました。

「そうだ、おまえはここで死んでいく」。突然の声に驚いて、彼は目を開きました。目の前の草に、テントウムシがとまっていた。「今話しかけたのはおまえか」。テントウムシが微笑むのがわかりました。「おまえだけが話ができるのか」。彼の生涯の謎が今解けるかもしれないのです。彼は最後の力を振り絞って尋ねました。「いいや」。テントウムシは静かに言いました。「すべての虫が話をする事ができる」「すべての?」「虫だけではない。草も、石も、そして死んだものも、みんな話することができる。人間が心を開きさえすれば」「心を開く?」。その瞬間、彼にはすべてがわかりました。人間も、虫も、草も、石も、魂も、すべては同じものなのです。すべては語り合うことのできる友達なのです。彼は、とても平和で穏やかな気持ちになりました。

「おまえはよくやった」。懐かしい声がありました。「父さん」。そこには、父が母が、そして小さな妹が立っていました。「世界中の人に虫のことを教える、それがおまえのやるべきことだったのよ。よくがんばったわね」

翌日、彼を探しにきた人々は、決して笑わなかった彼が、穏やかな笑みを浮かべて死んでいるのを見て、悲しみ、そして不思議に思いました。

グランドゼロ症候群

テロの後遺症に苦しむ消防士たち

中田 光



中田 光 / なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。米国ベルビュー病院留学。東京大学医科学研究所微生物株保存施設助手などを経て、2000年より国立国際医療センター呼吸器疾患研究部細菌性呼吸器疾患研究室長。

9月11日の夜、いつものように就寝前にニュースを見ようとテレビのスイッチを入れた私は、全身が凍りつくような戦慄に襲われた。いきなり目に飛び込んできたのが、留学時代よく出かけたダウンタウンから眺めたワールドトレードセンター(WTC)のサウスタワーに2機目の航空機が突入する映像だったのだ。米国の繁栄の象徴とも言うべきWTCがいつも簡単に、一瞬のうちにして完膚なきまでに粉々になってしまうとは、いったい誰が想像したのだろうか？ 私はテレビを見ながら、旧約聖書に出てくるバベルの塔の不思議な物語を思い出していた。天空までとどく塔を造るという人々の傲慢な試みに怒った神がとった行動は、それまで同じ言語で話していた人々を、一瞬にして違う言葉を話すようにしてしまったことだった。神は言葉のもつ威力をよく知っていたのだろう。人々は共同作業ができなくなり、散り散りに去って、やがて塔は崩壊する。

20世紀後半の軍拡競争を連連の崩壊という形で勝ち抜いた米国は、さらに世界中に基地を造り、国運を軽視し、京都議定書は批准せず、グローバルスタンダードの名の下に自分たちのやり方を世界中に普及させようとしてきた。ITが進歩していけば、やがて世界はひとつになる。そんな幻想をホワイトハウスの人たちは抱いてきたのではないかとWTCのテロは、そんなグローバルスタンダードの幻想と傲慢を打ち砕く21世紀の「バベルの塔」のように思えた。

それから米国がとった行動にはまたかとうんざりする思いがした。テロは犯罪だが、国と国が存亡を賭ける戦争ではないはずだ。ホワイトハウスは、これは戦争だと宣言して愛国心を鼓舞し、お決まりの空爆とハイテク戦争を始めた。タリバン政権は崩壊したが、米国が勝利したとは誰も思っていない。ただ、難民と孤児と虚しさで新たな憎悪を生んだだけだった。その後1年も経たないうちに、ITバブルが崩壊し、米国経済の成長も驚愕を見せ始めた。経済にも国際政治にも無知な私だが、数十年後の歴史の教科書には、WTCの崩壊がアメリカ凋落の最初の象徴的な事件として書かれるような気がしてならない。

しかし、その後New York Fire Department(FDNY)の消防士たちが崩壊寸前のWTCの最上階に命をかえりみずに駆け上がったこと、まだ煙塵の立ち昇る崩壊現場で懸命の救助にあたっている姿が報道されるにつれ、米国とアルカイダ、タリバンのどちらが

正しいかという議論はさておき、彼らに支援と共感の輪が広がっていった。私も留学時代の共同研究者マイケル・ワイデン医師が消防士たちの健康状態の調査を始めたことを知って、矢も楯もたまらず、テロから半年後の2002年2月に旧知の染谷さんと大学院生の寺川君と共にFDNY54分署とワイデン医師を訪問することにした。染谷さんはライオンズクラブ国際協会(*1)大会参加委員で、渋谷消防団の功労者でもある。ライオンズクラブが、FDNYとアフガニスタンの難民にライオンズクラブ国際協会より4万ドルの寄付を贈ると決めたことを伝える表敬訪問だった。

WTCの崩壊現場は、有名なチャイナタウンから西へ歩いて約15分のところにある。午前中にニューヨーク入りした私たちは、一刻も早く現場を見たいという気持ちに駆られて、チャイナタウンで昼食をとった後、早速徒歩で現場に向かった。以前であれば、空を仰いで2本の塔を目指せば自然とどり着いたのに今ではそうはいかない。しかし、最高裁判所を過ぎたあたりから、立っている警官の多さと市民の緊張した雰囲気によって、自然に現場へと足が向かった。あと約200mというあたりから、以前あったモダンな商店街はみなシャッターを閉め、アスファルトは粉塵で白く変色し、道行く人もまばらで、きな臭いにおいが鼻を突いた。あと100mというところで、私たちは、蟻の這い出る隙間もないほどのバリケードと高い塀と警官に行く手を阻まれた。仕方なく、遠巻きに現場を窺うと、ブルドーザーのエンジン音や巨大クレーンの金属音が鳴り響いていて、急ピッチに瓦礫の撤去作業が進んでいることが窺い知れた。近くの塀には掲示板が設けられ、沢山のメッセージが寄せられていた。残念だったのは、「Remember 9/11 & 12/8」と書かれたポスターがあって、60年前の真珠湾攻撃が今回のテロと同じ扱いにされていたことだった。

翌々日、今回のテロ後の救難活動で活躍したFDNY54分署に向向いた(写真1)。54分署は、マンハッタンのおぼろ中心部、48丁目、8番街にある。WTCはここから真南に6kmほど下ったところであり、当日は、1機目が突入してすぐに日勤の消防士が14人出動して、全員死亡している。大災害の時には、通常3分署が1チームを作り救難にあたることになっているが、今回は54分署を含むチーム35名が出動し、全員が死亡した(FDNY全体で343人死亡)。テロの日、非番で難を逃れたJohn Fila消防士が我々を迎えてくれた。染谷さ



写真1



写真2:染谷さんはライター29号「感染と人間(12)」にご登場されています。



写真3

んはかしこまって、消防庁総監、ライオンズガバナー、渋谷区長などからの親書を手渡し、救援活動にあたった消防士の勇気と献身に敬意を表し、犠牲になった多くの人たちのご冥福をお祈りしますとお伝えした(写真2)。また、マグナム社より出版された今回のテロの写真集の収益がFDNYに寄付されることもあわせてお伝えした。Fila氏によれば、今回の救難活動で犠牲になった日勤の消防士たちはほとんどが10年以上のベテランで、人的損失を回復するのに何年かかるかわからないと言う。また、第二陣以降出動した消防士たちの中には、呼吸器の障害のために退職を余儀なくされた者や、仲間を一時に失ったショックから神経症になった消防士が多いと言う。ニューヨーク市では、800人の精神科医やカウンセラーたちが、ボランティアで消防署や家庭を訪問し、心のケアにあたっている。Fila氏は淡々と話してくれたが、それだけにテロの後遺症の深刻さが伝わってきた。

後日、ニューヨーク大学ペルビュー病院にかつての共同研究者であるマイケル・ワイデン医師を訪ね、Fila氏の話をもう少し医学的に理解することができた。ワイデン医師は、ニューヨーク大学医学部の助手を務める傍ら、FDNYの健康管理医として、テロ後の消防士たちの健康状態を調査している。彼の調査によると、テロ後の1週間間に、FDNY 12,000人の消防士のうち、11,000人が救難活動に出動し、その後6ヵ月間の調査で、301人が慢性的咳に苦しんでいることがわかった。咳以外の主な症状は表に示す通りで、呼吸困難を訴える者が94%に達している。

表:テロ後に慢性的咳を訴える301人の消防士の主な症状・徴候

呼吸困難	94%
胸部苦悶感	85%
胃食道逆流症(GERD:胸やけや胃酸を症状とする)	87%
慢性鼻炎	54%
夜間不眠(主として咳による)	63%

肺の機能で重要なのは言うまでもなく、空気を取り入れて酸素を肺の毛細血管に送り込み、二酸化炭素を呼気に排出することであるが、努力肺活量(できるだけ息を吸い込み、できるだけ息をはいたときの呼気量)が、テロ前に比べて500mℓ以上も減ってしまった

人が301人のうち、54%もあった。原因は細い気管支に粉塵が吸い込まれたため、そのことを示す1秒量(1秒間にはける最大の呼気量)の減少が顕著だった。また、87%の人に胸やけや胃酸の症状が現れたのは奇異な感じがするが、次の一消防士の話を知ったときうなずける気がした。

45歳の消防士長。2機目が突入した直後に現場に到着し、サウスタワーの前で救難活動を指揮し、被災者の救出にあたった。サウスタワーの崩壊で落下する粉塵に埋まったが、幸い怪我は軽微で、自力で這い出したが、周囲は「地下牢のように暗く、濃霧よりも濃い」粉塵に覆われていたと言う。やがて激しい咳と嘔吐に襲われ、彼は失神しそうになるが、懸命に口と鼻孔から塵を掻き出した。しかし、彼は大量の粉塵を吸い、また呑み込んでしまったため、以後、慢性的咳と呼吸困難、胸やけに苦しんでいる。

つまり、タワーの下にいた人たちは、あまりに大量の粉塵を吸っただけでなく、呑み込んでいたことになる。前代未聞の惨事で、市民の救出が優先され、消防士の保健にあまり注意が行き届かなかったのだろうか。マスクをして救難にあたった消防士はテロ初日は7%で、2日目でも15%に過ぎなかった。マスクを着用した者は、表にある症状・徴候が軽微であったことは言うまでもない。以上は、比較的短期間(6ヵ月)の調査だが、これらの後遺症が今後10年以上経って、消防士たちの健康にどのような影響を与えるかを考えると非常に心配である。塵肺症になり呼吸不全が進む人、アスベスト肺(*2)に至る人、肺癌を合併する人など、様々な長期的な影響が予想される。

テロから半年経って、グランドセントラル駅は何事もなかったように通勤客でごった返していたが、地下道にはテロの行方不明者の写真を貼った掲示板が立てられ、「もしかして」という家族の想いが切なかった(写真3)。それにしても、テロの被害にあって後遺症に苦しむ消防士や市民たちは今後どのような生活を送っていくのだろうか?おそらく、事件の重大さの影に隠れて次第に人々から忘れられていくに違いない。そうなる前にせてこの一文をしたためておきたいと思ひ、筆をとった次第である。

(*1)1977年にアメリカで結成された世界最大の社会奉仕団体

(*2)建築資材の中などに含まれているアスベスト(石綿)は、吸入した場合悪性胸膜中皮腫を発症する可能性が高い。

出会い (23)

宋 潤 禪 師 (続)

奥村 一郎

3. 蝉時雨

毎年のように、一度は老師を訪れる習慣になっていたが、ある真夏に三島の龍澤寺を訪ねた時のことが思い出される。そのころ、三島のカトリック教会の主任司祭をしておられたフランス人のメイヤー神父も同行、それに、中年の信者2人がいっしょについてこられた。いつものように、ごぜんまりした庭園に面した茶室に私たちを迎えてくださった。

そこでは、すでに、老師を中心に囲んで4つの大きな座布団がきちんと並べられていた。互いに挨拶を交わしながら、しばらく話がすすむ間に、茶道の師匠でもある老師が私たちひとりひとりに丁寧に茶をたててくださった。和やかなその一時が今も懐かしく思い出される。

ところで、その時、ちょっとひょうきんな新聞記者のYさんが急に話の流れを変えるような質問を出した。

「私たちのカトリック教会では、このごろ、急に変わって、今まで長い間使ってきた古いラテン語をすっかり捨てて、日本語だけで祈るようにと、お上のパチカンから指示が出ました。まことにありがたいことで、皆大喜びです。以前は、私たち日本人にはチンプンカンプンのラテン語で、さっぱり、言葉の意味が分からず、舌もまわらず、頭が痛いばかり、祈りの心も空室してしまいました。ところで、禅寺では、『ナムカラタンノトラヤーヤ』というような、わけの分からぬお経を、まだ、唱えておられますか?」

いかにも、正直な質問とはいえ、それまでの穏やかな有り難い話し合いに、いきなり、冷や水をぶっかけられたみたい。一瞬、私たち、皆赤面、その不躰な質問に基だ当惑、目を伏せて黙ってしまった。しかし、老師は、少しも気を悪くされた様子もなく、落ち着いて口を開かれた。

「あなたには、蝉の声が聞こえるかな?! ああ、凄まじいまでの蝉時雨の声が?!」

なるほど、ふと思えば、皆、話に気をとられて、森を覆うような蝉時雨の声には気づかずにいたことに、あらためて気づかされた。老師はさらに力強い声でまた言われた。

「あの蝉の声! 蝉は命の限り鳴いちゃう。大空に向かって森が燃え上がるかのような命の叫びじゃ! 祈りとはあの蝉時雨のような人間の命がけの叫びじゃ。神も仏も、人も自然も全く一つになって



歌う宇宙讃歌じゃ! それこそ、ナムカラタンノトラヤーヤじゃ!」

これには、だれも無言。そこには祈りの源泉そのものが示されているように思えた。

意味の分からない言葉の祈りよりも、分かる祈りのほうがよいことは確かである。そのほうが「祈りの心」がよく伝わる。しかし、言葉の知的理解は、しよせん祈りに関する限り二義的である。学者であればよく祈れる、というものではない。まことに祈れる人というのは、神を愛し人を愛することを知る人のことである。キリスト教的祈りの本質は、それ以外のところにはない。著名なスペインの聖女テレジアは言う。

「祈りで大切なのは、多く考えることではなくて、多く愛することです」

老師は愛という言葉は用いない。命の叫びと言う。キリスト教においては、愛は命、それも永遠の命、すなわち神と同義語である。

4. 敵なんかない

美しい富士山の裾野で、丸1ヵ月、25名ほどの修道女と大黙想をしたことがある。その最後の日、三島の龍澤寺の宋潤老師をお訪ねした。大変喜んでくださって、本堂や座禅堂も、質素で自然なたたずまいのなかに、澄んだ修道の香りが感じられるところは昔と変わらなかった。私にとって昔といえ、1948年6月28日夜の対面の時である。「あなたは、今、キリスト教をよく分かったと思う。しかし、まだ、頭で分かっただけだ。体で分かなければならない。体で分かるためには洗礼を受けなさい」と言われ、全く予期しない引導を渡された時のことである。今も、その時、その場はいつも眼前にあり、その言葉を忘れることはできない(「出会い」第6回参照)。

そこで、案内された本堂では、老師のご希望で、名曲グレゴリアンの聖母讃歌「サルベ レジナ」を、シスターたちがきれいに歌い終わると、後ろから、老師が力強い声で「アーメン」と結ばれたのにはひととき感動。

さて、お別れするところになって、いっしょに広間でお茶をいただきながら話を聞いていた時、老師がつぶやくように言われた言葉も忘れられない。

「キリスト教は“敵を愛しなさい”と言いますな? 敵なんかない

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。

48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年より2001年までパチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。現在、京都聖母学院短大名誉教授。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生い立ち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

んですよ!

まるで遺言にも似た一言を残された。急に難しい問題を突きつけられたよう。どうして、お別れの時に言われたのか、今にしても、私には分からない。他の参加者も、それなりに、ショックだった様子。

たしかに、福音書には愛敵をすすめる言葉がある。マタイ5章43 - 48節と、ルカ6章27 - 36節に明記されている。事実、このキリスト教を越える鋭い禅的発想は、すでに、世界的に著名な鈴木大拙博士の言葉があったが、おそらく、宋淵老師も知っておられたのであろう。この禅仏教の霊性とキリスト教の霊性との接点における大問題は、臨済禅での大疑団(* ということができよう。ここでは、読者の方々のご意見もお聴きしたい。なぜなら、人間の幸不幸を分かつ根源は「愛」の問題にあるからである。宗教の真偽が問われるのも、そこにある。にもかかわらず、宗教が強固であればあるほど、悲惨な戦争や対立をもたらす現実をどのように考えてよいのか。「人間、これ矛盾せるもの」と言われるだけでなく、「宗教、これ矛盾」と言うしかない。

キリスト教では「原罪」、仏教では「無明」という暗い場がある。いずれも、愛と慈悲に包まれた天国や極楽浄土とは、およそ裏腹の世界である。この地上の哀れな人間の理不尽を、どのようにして担って生きることができるのだろうか。黙してひざまづくしかない。

(*) 禅者に求めらるる3つの心構えの1つ。「疑い多きところに真理多し」という語があるが、それをさらに徹底した禅修行の心構え。

P.G.I.のお知らせ

バート・グリン 写真展 Burt Glinn "HAVANA"

2002年10月16日(水) - 11月29日(金)

1959年1月1日に、マグナムの写真家バート・グリンはキューバのハバナに飛んだ。

大晦日のパーティーで話題になっていた、パティスタ大統領が亡命する話には直観的に反応し行動に移したのだった。このことがキューバ革命を目の当たりにし、若き日のフィデル・カストロとの出会いとなった。それから42年後の2001年1月10日にキューバで、「10日間の出来事」をまとめた写真展を開催した。そしてこの時に彼はカストロとの再会を果たした。

これを機に写真集「HAVANA」が刊行され、世界中で巡回展を行うことになった。

本展ではカストロ氏の雄姿を中心に60余点を展示。

2002年12月3日(火) - 20日(金) 常設展

チャリティー写真展のご報告

フランコ・メノン写真展「ベシャワール・アフガンへの門戸」(7月22日 - 8月9日)は盛況のうちに無事終了いたしました。

多くのみなさまにご覧いただいた上、チャリティーへご協力いただき誠にありがとうございました。尚、作品の売上の一部を「ベシャワール会」の医療活動及び難民救済活動のための支援金とさせていただきます。

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦 4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143

JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分 [入場無料]

【営業日】 月 - 金 【休館日】 土・日・祝日

【営業時間】 11:00 - 19:00

* P.G.I. についての詳しい情報はホームページ (<http://www.pgi.ac>) をご覧下さい。

表紙の言葉



写真: クリス・スティール『パーキンス
アフガニスタン、1996年』
写真提供: マグナム・フォト/東京交社

カブールの北、迫撃砲が飛び交うなか、位置につく反タリバン軍の義勇兵

「...山やまがぐるりを囲み、わたしたちがその中心にいる。もやの多いイギリスでは、これほど多くの星を見たことがない。わたしは果てしない天空の輝きを存分に見ようと、あおむけに寝ころがった。今、この下には破壊された村があり、たくさんの死者と家族を失った人びとが横たわる。それなのになんと壮大な、胸が痛くなるような輝きだろう。わたしは思った。いつか、この国に平和が訪れたら、この厳しい土地が緑でおおわれる春の季節に、息子たちを連れてこの場所に来よう。ロバを借りて、このあたりの村を順にめぐってみよう。こんなふうにあちこちの村に滞在して、村人たちと食事をもにし、お茶を飲もう。いつの日にか...」

写真集『アフガニスタン』クリス・スティール『パーキンス』(晶文社刊)より

職人肌のスタッフに助けられて

50のベッドで年間1000有余の
手術をして病棟を回転していくには -

米川 泰弘

昔から“海外では教授職はその仕事ぶりが絶えず厳しい評価にさらされていて、1度就任してもその座は終身安泰であるとは限らない”という話をよく聞いてはいた。最近、その通りの事件がこちらで相次いで発生し、少なからず驚いた。教授会の厳しい選考を突破した新任教授たちが、スタートわずか1～2年で退任せざるを得なくなったのである。その主な原因は、着任後自分流の方針を強引に押し通そうとして、前からいる医師団や看護部と軋轢が生じたことである。またそれが外科系である場合、それに加えて手術の結果があまりよくなかったり、手術がいつも長時間にわたったりすると、そういう風評を聞いて患者が少なくなり手術件数も減っていく。こうなると病院の収益、ひいては経営に大きな影響が及んでくることから、ついには病院の運営部がのりだしてきて退任を促す、というパターンである。指導力と実績を内外にはっきり示せなければたちまち首が飛ぶという厳しさを目の当たりにした。私の場合は夢中のうちに10年近くが過ぎ去ってしまったが、今このような事件が次々と起こると、あらためて遠い“極東”から来たカルチャーの異なる外国人が、この白黒のはっきりした弱肉強食の社会で今までよく生き残ってこられたものだと思う。1つには、脳神経外科に忠実な職人肌のスタッフたちに支えてもらったことがその大きな要因であると思う。今回はそういう人々のことをテーマにしたい。

まず最初に紹介したいのは、もう定年退職したが非常に有能であったスイス人の秘書のJ女史である。彼女はドイツ語の他に英語、フランス語、イタリア語、スペイン語の5カ国語を自由に話し、読み書きし、色々な国から来る患者や家族、医師などに対応してくれた。専門用語にも精通し、種々の文書の作成も確実に早く信頼できた。手紙や文書には大変重きを置く欧米では、これは大切なことである。中でも多言語国のスイス人はとりわけ言語には敏感であり、ミスのない書類作成を求められることができる。私には秘書が2人いて、彼女は主に臨床、病棟の事務を受け持っていた(もう1人は研究、教育に関しての事務を受け持つ)。仕事の内容は、例えば私がテープに吹き込んだ毎日の手術記事(記録)や手紙を口述筆記で作成したり、入院予定者への案内状の送付、通信文の作成などの他に、7人いる脳神経外科全体の秘書たちの統括も行っていた。また、私宛の



米川 泰弘 / よねかわ・やすひろ

1939年、三重県津市生まれ。64年、京都大学医学部卒業。

京都大学医学部助教授、国立循環器病センター・脳神経外科部長などを経て、93年より、チューリッヒ大学脳神経外科主任教授。

チューリッヒ大学病院 <http://www.usz.ch/>

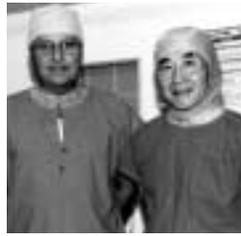
郵便物や通知などの重要な書類は開封してチェック、整理した上で私に回してくれるので、大切な情報が一目瞭然に分かる。秘書の最も大切な条件の1つに余計なことは口外しないことが挙げられるが、彼女はそのお手本でもあった。またアポイントメントのない人が不意に電話や来訪で私と話をしようとしても、ガードを堅くしてなかなか会わせないという、いわば嫌われ役もしてくれたが、これがなぜ重要なのかはこちらに来て初めて分かった。細切れの時間では大切な話をしたり、重大な決断ができないことを考えると当然のことである。誰でも時間が十分でないといふに余裕がなくなり、相手に対して配慮のある対応ができなくなる。彼女の後に何人かの秘書を経験したが、彼女ほどの人は現れず、J女史の有り難さをあらためて思い知った。

日本の大病院では中央手術室システムが一般的で、手術室を色々な科で共同で交代して使うことが多い。麻酔医やナースも様々な科の、様々な手術をこなさねばならない。一方こちらには脳神経外科専用の手術室が4室ある。またそこには脳神経外科専属の麻酔科のスタッフと専属のナースと看護助手が働いている。脳外科手術を熟知した専属のスタッフといつも仕事ができるのは大きなメリットである。4室のうち2室は特殊な手術用なので、普段よく使うのは残りの2室であるが、予定に組み込まれた手術と予定外の緊急手術を合わせて1年間に1000件余りをこの2室でこなしていくには、あらゆることを考慮に入れなければならない。1つの手術が長引いたり、再出血などで再手術になったり、緊急手術の割合が増すと、スタッフの負担が重くなり、疲労がたまり病気で休む、残ったスタッフに負担がかかる、といった悪循環に陥ることになる。従って手術は午前、午後2件ずつ、計4件(多くても5件)にとどめ、午後4時半までには終えるようにプログラムを組んでいる。この中に若いドクターの育成(大切だが時間がかかる)をも組み込んでいかねばならない。予定通りにプログラムを推し進めていくには、何人かの“プロの職人”の存在が必要不可欠である。

中でも特に有り難い存在であるクロアチア人の麻酔医、C医師を紹介したい。彼の麻酔術はまさに達人の域に達していると言える。その卓越した技術はどんなであるかという、彼が麻酔をかけた患者はいつも、開頭手術の最後に頭皮の縫合を終えて手術が終わる、



図:座位の手術(Roth氏作)



専属麻酔医のCurcic医師と筆者



専属イラストレーターのRoth氏

頭部固定のフレームをはずすと同時に麻酔から覚めて、気管内に挿管していた麻酔用の管をはずせるような態勢にあるのである。他の麻酔医の時はこうきっちりいくとは限らず、麻酔が覚めるまで数時間かかることも珍しくない。そうすると次の手術の用意ができなかったり、手術が終わった後に術部で何か異常が起こったのではないかとCTの検査をしたりと余計な手間と時間をとることになる。反対に麻酔からの覚めが早く、フレームをはずすより前に覚め始めると、患者は半覚醒の状態で抜管以前に色々な不測の事故が起こりやすいので、麻酔医の経験豊かな、麻酔薬使用の匙かげんは大切である。また、手術中に患者の体温が冷えて下がり過ぎると、麻酔の覚め際に全身の震え(シバリング)が起こる。これが起こるとその際の患者の苦痛を和らげるために再度麻酔薬を追加して体を暖めねばならないので余計な時間がかかるのであるが、よく観察すると、彼は術中に自らそっと患者に毛布をかけて患者の身体が冷えずぎるのを防いでいるのである。

また、当科では、患者を座らせて座位の体位で行う手術(図)が、全ての開頭術及び脊椎髄脊椎の手術のうちで1/4～1/3を占めている。この座位による手術は、術中に空気栓塞を起こす危険性があることが喧伝されて日本や米国に於いてはほとんど行われていない。しかしながら座位の手術を安全に行うことができれば、その利点には計り知れないものがある。但し麻酔医にとっては、手術前の準備が大変で、慣れない人だと数時間もかかるし、また、術中の麻酔管理も仰臥の体位の時より神経を使う。ところがC医師の場合は普通の開頭の場合と同じ数十分で、難なく準備を整えてくれるのだから大変助かる。また術中も、術者が空気栓塞にあまり気を取られて本来の手術の進行が妨げられることのないように色々気を遣ってくれるなど、さりげない配慮や工夫で惜しまぬ協力をしてくれるので本当に感心する。最近C医師が自身の病気で入院し2か月間不在になった時ほど、このよきパートナーの有り難さを思い知ったことはない。

手術室のナース、フィリピン人のM女史についても是非書かねばならない。いつも感心するのはまず、彼女の大変気持のよい礼儀正しさである。また手術中はその勤のよさである。術中次に術者が何を要求するかを一先先に読んでいること、また、術者のクセをすばやく読み取り、それに合わせて何も言わなくても次に必要な手術

器具をタイミングよく手渡してくれることである。彼女と一緒に手術をすると流れがスムーズになり動脈瘤の手術も、バイパスの手術も、2時間以内に済むことがほとんどである。慣れないナースの時では所要時間に30分から1時間の差が出る。また例えば大変緊張を要する血管縫合の際に、少し温か目のリンゲル液を術者の手及びナイロン糸に注ぎかけてくれるタイミング、その適温、適量さは余人の追従を許さない。こうして糸結びの際のナイロン糸のすべり具合がよくなり、術者の心が和み、手術は速やかに進行していくのである。有能であるのにあくまで謙虚で、さらに向上を目指して新しいことに挑戦しているのには脱帽する。例えば以前“術中MRI”のことを連載に書いたが(42号参照)、当科が、MRIの磁気に影響されずに手術室で使える手術器具を揃えたり、開発したりしているのに彼女が大きく貢献しているのである。私生活では敬虔なカトリック教徒で、周りに困っている人がいれば喜んで力になり、自身はつましく暮らしながら故国に仕送りをして甥の学費を出している。先日彼女は手術室看護部の幹部になるための試験にチャレンジし、見事合格、今しばらくは研修のため他科の手術部に出向いている。というわけで、当分の間私は辛抱しなければならない。

脳神経外科専属のスペシャリストの中にはメディカルイラストレーターや写真家、コンピューター専門家もいる。スイス人のイラストレーターのR氏は、学会発表の資料、論文の作成、学生の講義、患者のカルテ作成の充実などには欠かせぬ存在である。彼は脳神経外科の手術を知り尽くしているイラストレーターであり、当科にとっては大変貴重な存在である。いつも現場に居合わせて術野で何が行われているのが理解しながらしっかり観察しているので、彼のイラストは上手なだけでなく迫力があるのだと思う。私どもの論文に添えて描いてもらった彼の絵が、脳神経外科の専門雑誌のカバーに時々選ばれるのは、当然のことに思われる。

その他にも、挙げたい人々がまだまだいるが、脳神経外科に忠実な、このような職人肌の人々が中核になって、それぞれの受け持ち仕事を責任持って果たすだけでなく、さらに独自の工夫や開発を加えて支えてくれ、カバーしてくれたので私もなんとか今までやってこられたのだとしみじみ感じる次第である。

ワインのコレクの話

ワインの熟成を助ける
コレクの変遷について

横山 弘和



横山 弘和 / よこやま・ひろかず

1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。

88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在佐多商会業務室在籍。

ヨーロッパを中心とした限られた国々でのみ消費されていたワインは、17世紀中頃に扱いやすいワイン瓶が考案され、さらにその口をコレクで封をすることができるようになったことにより、国際的な貿易商品として広く流通するようになりました。今回は、このコレクについて取り上げてみたいと思います。

コレク栓の登場

コレクはワイン瓶の口の封をするのに最も適した木の皮(樹皮)と考えられています。現在まで、自然か人工かを問わず、他のいかなる物質より優れているとされています。コレクが理想的な瓶の栓である理由として、軽さ、清潔さ、大量に入手できることなどがありますが、さらに重要な特性として弾力性が挙げられます。機械で瓶の口に入れられるほど容易に圧縮でき、すぐに膨らんで少しの隙間もなく口をふさぐことができます。そしてワインの一番の敵である、外気に含まれるバクテリアなどの細菌からワインを守ります。液体やガスなどもほとんど通しません。加えて、コレクは無味・無臭のため、ワインの味・匂いに影響を与えません。耐久性にも優れ、高級なワインの瓶内熟成を可能にしてくれます。完璧なワイン・セラーに貯蔵すれば、ほとんど砕けることなく20～50年も原形を保持します(ポルドーのシャトーでは25年ごとに古いコレクを新しいコレクに替え、シャトー・ラフィットでは1781年のヴァンテージが貯蔵されているほどです)。

地中海沿岸の産物

コレクはコレクガン(学名ケルケス・スベール)の表層の厚い樹皮から作られます。この木は、特に火から身を守るためにスポンジ状に組織を進化させた成長の遅い常緑樹です。産出地は西地中海沿岸と大西洋沿岸に集中し、世界の全産出量の半分以上をポルトガルが占めています。最高級のワインに使われるコレクはほとんどがポルトガル産です。コレクの木は、木を植えて最初に樹皮を収穫できるまでに20年から25年もかかるため、栽培は長期間にわたります。しかも最初の収穫は品質が劣り使えません。ポルトガルでは樹皮を剥ぐのは9年ごとと法律で定められています。1回樹皮を剥くと、元通りの厚さ4～5cmのコレクが得られるまでに9年かかるためです。この木は成長すると高さ18mに、直径は1.5mにも達します。真夏に、

長い梯子を掛けて樹皮を剥く作業は楽な仕事ではありません。こうして成長した幹から樹皮を板状に剥ぎ取り、3か月間乾燥させます。それから大きなタンクの中で殺虫剤を加えて煮沸します。そして数か月間暗室で貯蔵された後、厚い板からコレク栓が切り出され、最も長い最上質のコレクが最高級のワインに使われることになるのです。

近代ワインの歴史

ワインは昔、壺や樽に入れられて運ばれていました。当時のワイン商人の一番の関心事は、腐敗しやすいワインをいかに迅速に売り払うかということでした。ワインに含まれるバクテリア(アセトバクター・アセティ)は酵素さえあればおそろしい勢いで繁殖します。しかし、すべての生化学反応と同様、温度が低いほどバクテリアの繁殖は抑えられ、また、アルコール含有率が高くても繁殖を抑えることができます。二酸化硫黄もバクテリアの繁殖を防ぎます。そこで蒸留したブランデーをワインに添加し、アルコール度を高めて運輸に耐え得るよう傷みにくくしたポート酒やシェリー酒が出現したのです(酒精強化ワイン)。そして17世紀半ばにガラス瓶とコレク栓が考案され、ワイン産業に一大革命が起こりました。コレク自体は既に古代ローマ時代、壺の口をふさぐために使用されていました。それは1939年に、3世紀頃のコレクで封をされた壺がフランスで発見されたことでも証明されています。それ以降1000年以上も忘れ去られていたコレクが、17世紀に至って再びその貴重な特質を認められることになったのです。仮にコレク活用の事実がなかったとしても、ワインの品質はその後の技術の進歩で改良され向上したことでしょう。しかし、良質のワインが長時間空気に触れないよう封をされることにより起こるワインの熟成は、瓶とコレクの存在なしにはあり得なかったのではないかと思います。

ガラス瓶の進歩

16世紀までは、ガラス瓶は樽からテーブルに運ぶのに便利なよう作られていました。イタリア風のガラス瓶は壊れやすかったため、藁や小枝細工や革で覆われ守られていました。また、中世の絵を見ると、瓶の口には布がねじって詰めてあったり、布で結んだり、皮革も使わ



シャンパーニュ・コルク



1969年の
ロマネ・コンティのコルク



アンジェロ・ガイヤ氏の
6cmコルク



パリのトゥールジャルダンに飾られている
古いボトルワイン

れています。時にはオリーブ油やロウで封がされています。17世紀初頭になると、ガラス瓶の需要が高まり様々な研究が行われるようになりまし。宮廷人で作家で、また海賊でもあったケネレム・ディグビー卿なる人物が、1630年代にそれまでよりずっと分厚くて重く、さらに安い瓶を作ることに成功しました。この時瓶に完璧な栓をすることが課題となり、コルクが目されるようになったのです。シェイクスピア作『お気に召すまま』の中で、ロザリンドが「あなたの口からコルクを抜いてくださいな。あなたのお便りを私が飲めますように」という台詞が見られるほどです。

コルクの長さ

コルクの長さは非常に重要です。普通辛口の白ワインの多くや、瓶内熟成をせずに早飲みするタイプの赤ワイン、特にボージョレなどに使われるコルクは短く4cm～4.5cmです。一方、ブルゴーニュのロマネ・コンティなどの特級、一級畑の銘柄ワイン、ホルドーの格付けシャトーものには大抵5cmの長さのコルクが使われます。イタリアのピエモンテ州で優れたワイン、バルバレスコやバロロを造るアンジェロ・ガイヤ氏は、自身が造ったワインのプロモートにあらゆるこだわりを見せ、彼の使うコルクはサルディニア島産の選りすぐったコルクで、しかも他のどのコルクより長い6cmです。もちろん長ければ長いほどよいということではありませんが、彼の造る長寿のワインにはピッタリと評価されています。なお、シャンパン用のコルクは3枚の張り合わせで作られています。そのうちの1枚がマッシュルーム型に突出している頭の部分になります。そして必ず“CHAMPAGNE”と焼き印がついています。これがシャンパンと他のスパークリングワインの区別を示したもので、A.C.法による保証となっています。

最近の問題 コルク大戦争

近頃、ワイン専門誌でワイン瓶に使われるストッパーについての論争が盛んに報じられています。あるワイン評論家によりますと、彼は毎日のように数多くのワインの試飲をするわけですが、1週間に少なくとも数本の傷んだワインに出合うと言っています。コルクに欠陥があるため中身のワインが腐敗し、とても飲める代物ではなくなったワインの割合が実に15%にも上ると訴えています。そこで、早く

消費すべきワインにはコルクは使わず、10年、20年と瓶内で熟成が期待できるワインだけに最高の品質のコルクを使うべきだと主張しています。コルク以外でワイン瓶に使える栓は王冠、ネジ栓(スクリュー・キャップ)、シリコンのコルク、王冠とポリエチレン、ニセコルク、再生コルクなど数多くあります。そこでワイン生産者も様々な栓を試しに使い研究しています。ある有名なシャトーの持ち主は、1970年もののワイン100本をスクリュー・キャップで栓をし実験してみました。結果は最初の10年は問題なく過ぎましたが、10年過ぎるとキャップが砕け始めて外の空気が瓶内に入ってしまい、またコルク栓よりも熟成が早まることも分かりました。現在、高級ワイン生産者として、やはり自然コルク以外を使う気はないと言っています。

一方後発のワイン生産国カリフォルニア、オーストラリア、ニュージーランドなどでは、コルクが完璧だという考え方にはとらわれないところも増えてきています。世界のワイン消費量のうち、約95%が早く飲んでしまう低価格のワインで占められている以上、それらのワインに天然コルクを使うのは無駄で、スクリュー・キャップで十分間に合うというわけです。しかも便利でコスト削減にもなります。そこで、これらの新世界ワイン生産国では、今後スクリュー・キャップに切り替えると発表するワイナリーのニュースが増えてきています。しかし、コルクの伝統文化を大事にするフランスでは、スクリュー・キャップは美しくない、安物のイメージがあるなど、プラスチックやスクリュー・キャップのワイン栓に対しては好意的な受け止め方はできないようです。

ワインの飲み方が十人十色であるように、コルクに対する考え方も今後どんどん変化していくかもしれません。

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世の、ほだに思っているブルゴーニュへようこそ。そんな、
種々の結露を生み出すぶどう畑、カメルスランの敷々、
中世そのものの街並み、美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力が、はだのぬるりを感じるところ、
それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
(株) 近多商會業務室 担当: 岩沢
Tel. 03 3582 5087

